

年間第17主日

第一朗読 創世記 18・20-32
第二朗読 コロサイ 2・12-14
福音朗読 ルカ 11・1-13

2025.7.27 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第一朗読はアブラハムと神様の対話の部分が朗読されましたけれども、これは先週の第一朗読から続いているわけです。日曜日のミサの第一朗読は、福音のテーマと関連しているところが選ばれますので、必ずしもずっと同じお話が毎週連続して続いているというわけではないのですが、ある意味でたまたまと言いましょうか、先週の箇所続き——間がちょっと抜けてますけど——続きのところが読まれました。

旅人の姿で訪れた神様をアブラハムが丁重に、親切に迎え入れて、そしてその迎え入れられた旅人がこれから起こるということを告げていく。アブラハムの家族に起こること、そして今日告げたのは、これから罪の町——ソドムとゴモラという町——を滅ぼしに行くんだっていう、そういうお話になっていて、いつの時点で相手が神様なのかということが分かったかっていうことははっきりお話の中には出てこないんですけれども、アブラハムは神様に対して、その町を滅ぼすのを思い留まるようにって願って、「10人正しい人がいれば滅ぼさない」、その約束にまでこぎつけるわけですが、お話はさらに進んでいって、結局、その旅人の姿の神様の使いがソドムの町に行ったら、ソドムの町中の人とその使いの旅人を自分たちの欲望のはけ口というか、慰み者にするために殺到した。で、旅人を迎え入れたのは同じようによそ者としてそのソドムの町に住んでいたアブラハムの甥っこのロトだけであつたし、旅人にひどいことをしないようにって諫めるロトも今度は町の人によって襲われそうになる。そういうような中で、つまりソドムには正しい人が一人もいないんだという話になって、天から火が降ってきてソドムの町が滅ぼされる。こう話が続いていくことになりますね。

神様が気に入らないから町を滅ぼされたって、読者がそういうような印象を受けるならば、それはちょっと読み方が浅いかもしれません。むしろ、旧約聖書というのは——新約聖書もですけども——古代の、本当に大昔の文学的な表現で書かれていますから、分かりやすいように「神様が滅ぼす」というふうに書かれているわけですけども、しかし旅人とか弱い立場の者を自分たちの欲望のために踏みにじっていく、そういうような人たちしかいない社会は自滅していくんだ、そういうことを汲み取って良いのではないかと思うんです。

ただ、一人ひとりどのように行動するかという行動の自由を与えられたのは 神様だから、その自由の結果、他者を踏みにじるっていう社会を作って、そして 自滅していく、そういう意味では、その自由を与えられた神様によって滅ぼされると言ってもいいかもしれないけども、本来は、人間そのものが、それぞれの社会の、また個人の決断によって、滅びの道を選んでしまう、そういう現実をこういう物語から読み取ることができるように思うんです。

でも、救い主を送られるっていう聖書全体のメッセージ——神様は人間が自分たちの行動の結果自滅していくのに任せることをお望みにならなかった。救い主をこの世にお使いになったというのが、キリスト教が信じていることですよね。イエス様を通してね。

人間が、自分自身の欲望とか思いを一番中心的な基準において他者を利用し合うということ以外の、そうではない、互いに助け合うことができるんだということをイエス様が示されたというふうにわたしたちは信じていますね。そして今日どのように祈るかをイエス様が教えてくれた、というこの聖書を読むことを通して、わたしたちもそのイエス様に繋がって、人間が互いに自分の欲望や自分の思いを中心に据えるのではない、他者との繋がり方——むしろ相手のことを思いやる、そういう繋がり方ができるし、そのことをまず始める者になっていく。そういう意味でイエス様に繋がるっていう思いを新たにするように招かれているように思うんです。

「主の祈り」の中心的な一つの願いは、「神様の国が来ますように」という願いですが、この「神様の国」っていうのは何か特別な宗教国家とか、新しい政治体制とか、

そういうことではない。人間の国の対比概念であって、人間の国ってというのはそれぞれ——王様だけではない—— 一人ひとりが、心の中で神様になって自分中心の——そこまで旅人を踏みにじったりそういうことは自分はしてないと思うかもしれませんが——この社会において自分がどう感じるかっていうのが一番大事なんだっていう思いは、もしかしたら誰もが抱いているし、そういうことが本当に遠慮なくむき出しで主張されているというのがここ最近のわたしたちの置かれている社会なのではないかと。自分の気分を害するもの、自分の思いを面白くなくする人っていうのは排除されねばならない、また罰せられねば、そういうことが主張されつつある。

極端なことかもしれませんが、「安全安心」っていうことが言われるのは、いつ頃から言われるようになったんでしょうかね。本当は基準っていうのは客観的な「安全」っていう社会を求めることだったのに、そこに「安心」っていうことが加わると——それは主観的なものだから——、いくら周りの状況が整えられても、「わたしは安心できません」って言えば、周りの人はそれに対応しなければならなくなるっていう、そういう主観的な思いを遠慮会釈なく前面に出して良いのだみたいな、あるいはそうすべきだ、それに周りの人は応えるべきだっていうような、それがあ意味では人の国なんですよ。

でも神の国はそういう自分の思いが何でも最優先ではないんだ、むしろ相手の——出会う人、特に困難にある人と弱い立場の人に思いを向ける、それこそが実はお互い同士が自分自身も生きることができるような社会なんだって、それを「神の国」っていうわけです。

わたしたちは、救い主は既にこの世に来たんだというふうに信じています、キリスト教ですからね。しかし、救い主が来ただけでは救いは完成しない。それも現実として受け取らなければならないんですね。人間とは関係なく神様が勝手に全部を都合良く整えてくれる、それではないんだと。むしろ、イエス様のその行動に、また呼びかけに、少しずつみんなが影響されて変わっていく、一人ひとりの行動が、また一人ひとりの人間関係の持ち方が、そして社会が、国と国との関係が、少しずつ変わっていく、それが、神の国がちょっとずつ実現していく。

イエス様は、それはちっちゃい種がだんだん育って大きな植物になるようなものだとおっしゃいましたね。そういうふうになんとなく人間の心が変わられて広がっていくんだ、それが救いなんだと、そのためにイエス様が呼びかけ続けている。そういう意味では、門を叩き続けて、そして執拗に頼んでいるのは、人間の側ではなくて、神様あるいはイエス様の側がわたしたちの心の扉を叩き続けていると言っても良いのではないかなと思いますね。

それに応えてわたしたちが神様の恵みによって変えられていく、その聖霊はみんな与えられる。その聖霊を受け取る可能性があるんだとね。一人ひとり、根っから 100% 悪い人はいないんだと。良い心がみんな残っている。それが芽を出して実を結んでいくように願い続けるし、小さなことから始めようとする。それがイエス様に繋がり、イエス様から祈りを教えていただいたわたしたちキリスト信者に呼びかけられていることなのではないかなと思います。

今日、またわたしたちはみんなと一緒に、今日の福音はルカの福音書だから——いつも一緒に唱えている「主の祈り」はマタイの福音書に出てくるバージョンを元にして翻訳されたお祈りです——ちょっと言葉は違うけど、でもその「主の祈り」を通してわたしたちがイエス様に繋がり、そしてイエス様と共に、この世の中が一人ひとりの自分勝手な思いによって自滅していくのではなく、互いに繋がり合って助け合うことができる者に変えられていく、そのためにまず自分自身が変えられていく、その恵みをお互いに願い合いながら、このごミサを通してイエス様ご自身を一人ひとりの心の中にお迎えしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>